

児童生徒の発達段階に応じた一貫性のある『生徒指導』と『学習指導』の展開が必要

学校生活における課題の例

■学級・学校生活より

- ◇小学校段階で荒れる学級が発生する状況が現在も継続している。
- ◇特別な支援を要する児童生徒への対応に苦しむ状況がある。
- ◇発達段階に応じた自主的・実践的な活動（児童会・生徒会活動等）や学級会・学級指導等の研究が低迷している。（集団での合意形成力に影響）
- ◇人間関係を形成する力の不足から、集団に適応できず苦しむ状況がある。

◇不登校数	小4	小5	小6	中1	中2	中3
H28年度	0人	3人	6人	24人	37人	29人
H29年度	3人	5人	3人	17人	26人	34人

■QUアンケートより

- ◇学級が満足群と非承認群に偏る管理型の傾向がある。
- ◇小4から中1までは、生活1次支援（自ら一斉指導に参加できる）児童生徒が増加傾向にあるが、生活3次支援（個別支援）の必要な児童生徒が一定程度存在する。
- ◇小中ともに「親和的なクラス」は増加傾向にあるが、中学校において2回目のアンケート（11月実施）で、「親和的なクラス」が減少する傾向がある。

学習における課題の例

■授業より

- ◇「同じ授業なのに、小と中では、先生と子どものやり取りは別世界」という指導方法に対する指摘がある。

■標準学力テスト（NRT）より

- ◇アンダーアチーバーの割合が中1から中2にかけて増加する。
- ◇学年が進むにつれて標準化得点が下降し、学習の2次支援（さりげない配慮と支援）の必要な児童生徒が増加する。特に中2、中3で増加する。
- ◇算数・数学は小6で落ち込み（小5の学習内容）、中1、中2と下降する。

■全国学力学習状況調査より

- ◇知識の習得と活用力の比較では、活用力に課題が見られる。
- ◇算数・数学の「割合」など、特定の学習内容で小中を通してつまづきが解消されない状況が見られる。
- ◇下位層は全国比で高い正答率を示しているが、上位層になるほど全国比で正答率の差が広がる傾向が見られる。
- ◇授業以外の学習に取り組む時間は、1時間以上の割合は全国と比較して高いが、2時間以上の割合が低い。

共通検討内容 1

「系統性と連続性をふまえた教育課程の工夫」

～ 一貫する「指導内容」・「指導方法」・「指導形態」の質と量の工夫 ～

- | | | |
|-----------------|---|------------------|
| 1) 系統性と連続性をもたせる |  | 何に系統性・連続性を持たせるのか |
| 2) そろえる | | 何をどのようにそろえるのか |
| 3) 交流する | | 何をどのように交流するのか |

【小中一貫教育とは】

「小中連携教育のうち、小・中学校が目指す子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育」（文部科学省）

小中一貫教育の推進 5つの視点（中学校区の状況に応じた展開）

- 1) 目指す子ども像、つきたい力、軸となる取組を明確にする。
- 2) 教育課程、指導形態に系統性と連続性を持たせる。
- 3) 児童生徒の教育活動や交流に連続性をもたせる。
- 4) 小中教職員間の連携・協働を通して指導力を高める。
- 5) 家庭・地域と連携・協力して小中一貫教育を進める。

共通検討内容 2

- ①小中一貫教育推進に向けた組織の構築
- ②学習・生徒指導等のデータの共有と授業改善・指導改善
- ③発達段階に応じた系統的な学級会・学級指導、自主的・自治的活動の研究
- ④つきたい力を明確にした系統的な学習指導の研究

選択内容 例

【指導力の向上】

- ①小中協働による単元研究・学校研究（主体的・対話的で深い学び）
- ②小中協働によるホーム&アウェイの取組
- ③つまづきやすい学習内容の分析と指導改善
- ④小中協働での指導と評価の一体化に関する取組
- ⑤can-doリストを活用した外国語活動と外国語教育の連携
- ⑥児童会・生徒会の協働による活動

【学習環境の充実】

- ①小6の中学校での授業や生活体験
- ②小学校高学年での一部教科担任制の工夫
- ③中学校教員の乗り入れ授業
- ④連続性を意図した小中移行期間の設定

【学習習慣の形成】

- ①発達段階に応じた家庭学習の開発
- ②学習習慣の形成に向けた小・中・家庭での課題と目標の共有
- ③小と中をつなぐ家庭学習スタンダードの構築
- ④小・中・家庭の協働による読書指導の推進

中学校区独自の内容 例 キャリア教育の推進